

## 「2023年度ベトナム国家大学ハノイ校スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学文学部2年 藤田 哲司

3月10日朝、関西空港に降り立ち、綺麗な空気を吸える喜びと共に、日本に帰ってきてしまったんだという寂しさを感じた。そう、この留学で過ごしたベトナムでの二週間が恋しい、と感じたのである。それからどうにも心にぽっかりと穴が空いた心地で、つぎはいつベトナムにいかがかなと考えてしまうほどであった。

帰国してからというものすぐに日本の友達に「ベトナム良かったよ！物価安くて人も優しくてめっちゃめっちゃ居心地よかった！」とベトナムをお勧めするけれど、なにか違うのである。観光でベトナムを楽しんで欲しいわけでは決してない。共にベトナムに行った京大の方とも話したが、再現性のある楽しさを求めるなら観光で十分である。そう、我々の体験したハノイでの二週間は、二度と再現できないのである。だからこそ再現できない分だけかけがえのない思い出として残っている。ベトナム航空の機内食、ちょっと怖い入国審査官、ハノイに降り立った時の喧騒、お店は日本に比べるとちょっと汚いけど優しい味で落ち着くフォー、ホテルの人懐っこい犬、USSHの学生との交流、予想以上にみんな真面目に日本語を勉強していること、ベトナムでの散髪体験、ノリでネイルを塗りに行ったこと、チャンアン村で実際に生きて住んでいる人たちがそのまま展示されていた衝撃、ハロン湾での案内人ディラン、地元民と一緒にしたダーカウ、ULIS学生との交流、ULISの発音講座がおもったより厳しめだったこと(ベトナム語は難しい笑)、酷暑のチャンアン村、大学での飲み会、カラオケ、ロンビエン橋踏破、クラブバイクの爽快感、などなど。誰か1人がかけていてはいけないし、どんな出来事もかけてはいけない。その瞬間にあった全てが感慨深いし忘れたくないと思う。

ではなぜそう思ったのか。

まず観光ではなく留学であったこと、これがものすごく重要だと思う。観光であれば、現地で知り合いができる機会、友達ができる機会はグッと減るだろう。現地の学生と強制的に交流できる機会があるから絶対に会をするし友達是可以する。また共同発表においては、日本とベトナムの両側面から物事を考えるため、海外から日本がどのように考えられているのかを知る良い機会になる。

これに続き、観光地に行くより、現地の学生とその場でしかできないことをある程度優先したことが重要であると思う。一緒に観光地に行って案内してもらったが、一緒にネイル塗ったり、一緒に学生向けのご飯屋さんいったり、一緒に夜に飲み会したり、一緒にカラオケに行ったりなど、一見日本でもできるようなことでもその場にいる人たちとしかできないことはいくらでもある。そういった一つ一つがかけがえのないものになっている。

二週間経ったいまでも写真を見返して楽しかったなと感慨に浸っている。それほどまでにあの二週間は濃厚で喉から手が出るほど戻りたい日々に見える。しかしそれらに憧れ続けるのではなくて、この思い出はしっかり心の中におきとめて、これからの生きていく糧にしていきたいと思う。